

日本赤十字看護大学附属 災害救護研究所が設置されました

設置目的

日赤の救護活動を中心とする諸活動等で得た知見を広く社会に発信・還元するとともに、災害救護に関する研究・教育活動を通じて我が国の救護の質・量の向上と活動領域の拡大に寄与することで、被災者の苦痛の予防・軽減に資する。

目標

- 1 日赤の有する災害救護の知見を集約し、実務的に利用可能な形に発展させる。
- 2 新たな知見・技術に関する研究を実施し、日赤の活動に還元し、我が国及び国際赤十字の災害救護の発展に貢献する。
- 3 主要な関連学会等において積極的に研究成果の情報発信を行うとともに、これら学会等の運営に積極的に貢献する。

主な活動内容

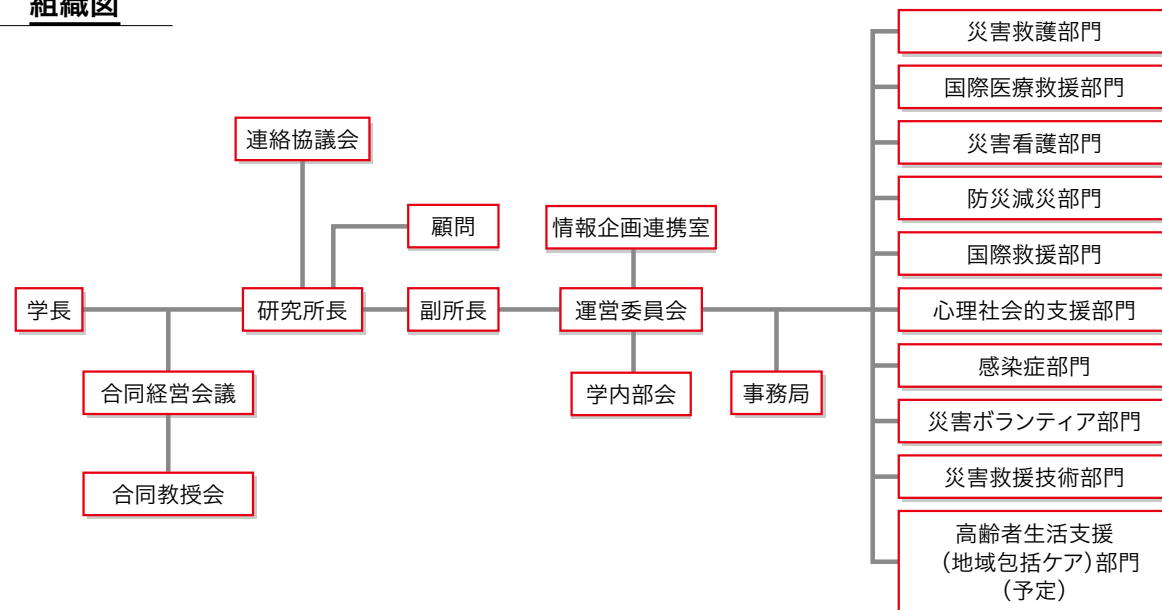
- 1 災害救護に関する調査研究活動

主な分野の例

- ▶ 災害医療・災害看護・国際医療救援・心理社会的支援・災害ロジスティクス・救援物資・被災者生活再建支援・防災減災・高齢者生活支援等

- 2 災害関連の研究及び教育成果の積極的な発信
- 3 災害関連に関する教育活動
- 4 日赤本社(救護・福祉部等)から委託された業務の実施
- 5 災害関連の主要な学会等における研究成果発表及びこれら学会等の運営にかかる主要な立場からの積極的な参画

組織図



TOP MESSAGE

日赤の知見とさまざまな技術を調査研究し、 災害救護活動の発展を目指します

所長
富田 博樹
(学校法人日本赤十字学園理事長)



世界がCOVID-19に襲われ、その戦いはすでに3年に及びます。我が国は現在もお度重なる感染の波に襲われており、全国の赤十字病院は、COVID-19の流行を災害同様と捉え、一丸となって、入院治療、発熱外来対応、他病院への応援派遣、介護施設などへのコロナ感染対応支援、ワクチン接種等を引き受けています。また、医療施設のみならず、支部、血液センター、社会福祉施設など、それぞれの持ち場で工夫を凝らしてこの難局を乗り切ろうと対応しており、日本赤十字社職員の方々にあらためて敬意と感謝を表します。

さて、災害救護活動は、戦後(1952年)に制定された日本赤十字社法上の業務として「非常災害時又は伝染病流行時において、傷病その他の災やくを受けた者の救護を行うこと」と明記されており、日本赤十字社(以下日赤)にとって、最も重要な活動の一つです。近年異常な頻度で発生している自然災害への積極的な救護活動はもとより、コロナ禍への対応など、日赤職員の活躍は目を見張るものがあります。

我が国の災害対応は、阪神・淡路大震災を契機に急速に発展し、医療だけでなく、被災者の生活を支える様々な分野の組織・

団体等が参画して協働するようになりました。その活動は年々改善され、大きく進化し続けていることは、我が国のみならず、世界の趨勢ともなっています。こうした災害救護を取り巻く変化のなかで、将来にわたり日赤が国内外問わず災害救護活動に貢献するためには、長年の経験で得た知見を学術的に分析・集約して社会に還元するとともに、新たな知見や技術を積極的に活用するための調査研究を行うことが必要です。

こうしたことから本研究所が日本赤十字看護大学の附属施設として設置される運びとなりました。守田学長のもと、私が初代所長に就任し、学園本部及び日赤本社の協力も得て運営されています。研究員は研究所からの依頼をベースとしていますが、日赤職員の皆様の中で、ぜひ参加したいとの意欲のある方は大歓迎です。勿論、日赤以外の組織からの参加も期待しています。客員研究員のポジションを用意しています。

この研究所の活動が我が国の災害救護を牽引することを願います。

そして、日赤がすべての被災者・被災地を支援し続ける力となり、災害救護における「要」となるよう努力することを切に願っています。

赤十字災害救護の実践・研究・教育創生の発信基地 人々の生命・尊厳・生活を守り抜く 活ける有機体として始動！

副所長
井村 真澄
(日本赤十字看護大学大学院
国際保健助産学教授)



このたび、赤十字のアカデミアである日本赤十字看護大学に災害救護研究所が誕生しました。赤十字活動の核心である、人々の生命・尊厳・生活を守り抜く組織として始動します。

本研究所は、遡る1864年の「国際人道法」(ジュネーブ諸条約)締結に基づく国際赤十字組織誕生、1877年博愛社(1887年日本赤十字社と改称、以下日赤)誕生から今日に至るまで、活動する赤十字有機体DNAを受け継いでいます。

世界有数の災害多発国日本での先進的な活動、日赤の国内外での支援活動実績等を集積し、研究・開発を発信し、さらに次世代育成のための活動ベースキャンプ、協働プラットフォームとして機能していきます。

各部門には、実践と英知を発信する日赤内外の精鋭メンバーが集結しています。多様で複雑化する災害に対して、当事者にとって必要な重層的支援を行うことのできる多職種協働連携を具現化した組織チームを構成し、部門横断的にも活発に活動していきます。志高い皆様の参画と協働も大いに歓迎しています。

超急性期から平穩期の各災害サイクルを連続的にカバーし、災害時要配慮者を含む新生児から高齢者までの全世代に対して、だれ一人取り残されることのない支援を目指します。

Leave No One Behind、だれ一人取り残さない支援-これが大変困難を極め、その実現に向けて、日々、非力・無力を感じる現実と直面します。しかし、だからこそ、ここを新たな出発点とし、日赤内外に広く開かれた本研究所のミッション実現に向けて、皆様と力を合わせ、発展的に活動を推進してまいります。

日本赤十字看護大学附属 災害救護研究所 事務局
〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3 Tel: 03-3409-0684 (直通) Mail:jrcrdi@redcross.ac.jp



災害救護部門

医療救護に関する研究と教育を実施して
災害救護の発展に貢献する

災害時のみならず平時における準備や体制構築を含め、現場活動から本部活動までの多場面にわたり、国内での医療救護活動に関しての研究と教育を行い、日赤救護班の進化および日本の災害救護の発展に貢献します。

部門長

中野 実

(前橋赤十字病院 病院長)



日赤職員として多くの救護活動を経験し、日本 DMAT 研修では発足初期から講師を務めさせていただき、日赤救護班研修会や日赤災害医療コーディネート研修会では立上げメンバーとして関与させていただきました。本部門の研究員は、皆、医療救護の活動・研究・教育において豊富な経験と実力を有する方々で頼もしく感じます。

防災減災部門

自助・共助の力を高め実用に資する
防災・減災のあり方を追求します！

防災減災部門では、災害マネジメントサイクル全体を俯瞰し、現在の防災・減災に足りない部分を中心に、実際に役に立つツール等の開発に軸足を据えて研究を進めます。研究成果は広く一般の方々への普及啓発を主目的とします。

部門長

白土 直樹

(日本赤十字社
総務局人事部長)



20年以上に及ぶ国内外での経験から、防災の推進には自助・共助の力の向上が肝要と痛感しています。また、防災の切り口だけで解決できる問題には限りがあるため、多方面の分野との平時からの連携・協働も不可欠です。防災減災部門の研究が、防災を含む広く社会課題の解決の一助となるよう努めてまいります。

感染症部門

災害時の感染症対策に関する研究を進め、
被災地の安全な環境作りに貢献します

一般に災害時には衛生環境が劣悪化して感染症が発生しやすくなります。災害後に必ず感染症が流行する訳ではありませんが、感染症対策は必ず必要になります。特に新型コロナウイルスの流行以降、効果的な対策を進めることの重要性は高まっております。

部門長

古宮 伸洋

(日本赤十字社和歌山医療センター
感染症内科部長)



普段は感染症を専門とする医師ですが、これまで国内外の災害対応に関わってきました。感染症対策は医療だけでなく、様々な分野に関わる課題です。各部門と連携し横断的な活動を行っていきたいと考えております。

国際医療救援部門

長年の日赤の海外医療支援の知識と
経験を活かして未来に寄与する

戦後 1960年のコンゴ動乱に始まり、長年行ってきた海外医療支援の知識と経験を無駄にせず、本研究所の他部門、および国際医療救援拠点病院と共同で、将来の人道支援活動に寄与する研究を行います。

部門長

中出 雅治

(大阪赤十字病院
国際医療救援部長)



災害医療というのは通常の病院診療とは異なり、皆が必要とは認めつつも、これに予算をつけて専門的に取り組む環境というのは民間ではほとんどありません。そんな中で本研究所の発足の意義は小さくないと言えます。今後私たちがここでどのような研究を行い、発信していけるかが問われることになる、ということを肝に銘じて努めてまいりたいと存じます。

国際救援部門

日本から世界へ、世界から日本へ、
災害や危機に向き合う力を高めます

赤十字は世界中で災害や危機に対応しています。国際救援部門は、日本における対応力を高め世界に伝えること、また、世界で日々新たに積み上げられている対応力を日本に应用することを目的としています。

部門長

佐藤 展章

(日本赤十字社
事業局国際部国際救援課長)



気候変動による災害の激甚化や新たなグローバル感染症などは、これまで別々に議論されることが多かった「日本」での対応と「世界」での対応との距離感を急速に縮めています。国際赤十字のネットワークのみならず、多くの国内外の知見を繋ぐことで、様々なブレイクスルーを目指したいと思います。

災害ボランティア部門

人間のいのちと健康、尊厳を守る
ボランティアの活動を支援する

頻発・広域・激甚化する災害に対し長く被災者支援活動に貢献してきた赤十字奉仕団（ボランティア）の役割やノウハウ等を集積、広く活用できるよう可視化すると共にノウハウの発展や活動に必要な支援等を研究します。

部門長

安江 一

(日本赤十字社
事業局救護・福祉部長)



災害ボランティアは担い手や活動が多様化し、現代的な概念として捉えなおす必要があります。赤十字奉仕団（ボランティア）や様々な担い手が被災者一人ひとりに寄り添いながら特色を活かし、相互補完的に連携して支援することが、被災者が地域で立ち上がる力に繋がると考え、赤十字として貢献できるよう努めたいと考えます。

災害看護部門

被災者の健康と生活に関する研究を行い
災害救護・減災に寄与する

世界中で災害が起きており、人々の生活環境が悪化し、健康を害している状況があります。発災後の救護・復旧支援、災害による生活と健康への影響低減に関する研究と教育を行い、災害救護と減災の発展に貢献します。

部門長

内木 美恵

(日本赤十字看護大学
国際・災害看護学教授)



日赤の国際救援、国内救護活動を経験し、現在は災害看護の研究、教育に関わっております。日赤の災害救護実践を調査研究し、理論や支援体制、減災に結び付けたいと考えております。平時からの備えに関する体制を検討し、災害で健康を害する人が少なくなることを目指します。

心理社会的支援部門

災害時の心理社会的支援の
発展と変革に寄与する

災害時に身体・健康とともに、心理・社会面のウェルビーイングもいたわる支援のあり方を実現すべく、支援現場の実践知とセオリーを統合した研究を行い、知見の集約および発信に取り組みます。

部門長

森光 玲雄

(諏訪赤十字病院 臨床心理課長)



どんな災害でも、そこに存在し喜びをもつ「人」の姿があります。災害等の危機的状況で「人間」を中心とした心理・社会的側面について知見を発信し続けることで、「緊急時にこそ個人の尊厳やウェルビーイングが守られるべき」という考えが社会に定着し、人にやさしい災害支援のあり方が発展していけるよう尽力してまいります。

災害救援技術部門

災害時、生命と尊厳を守り、苦痛を軽減する
「人道技術」の共創、発信拠点

被災者の生命と尊厳を守り、苦痛を軽減することを支援する「人道技術」の研究開発拠点です。多様な分野の専門家と、災害時に生命を守るための技術や手法を共創し、社会に幅広く共有することで、災害に強い社会の構築に貢献します。

部門長

曾篠 恭裕

(熊本赤十字病院 国際医療救援部
救援課長)



災害対応で最も大事なことは、災害により生命を奪われることを無くすことです。そのためには、医療救護に加え、避難支援、生活環境改善、良い復興を目指したまちづくりや防災教育等々、災害マネジメントサイクル全体において、多様な分野の技術が必要です。私達は「災害時に役立つ技術を普段使います」をキーワードとし、実践的な技術の創出と国際発信に取り組みます。